

---

# スマッシュ・ライトフェザー

クロエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スマツシュ・ライトフェザー

### 【Nコード】

N0739M

### 【作者名】

クロエ

### 【あらすじ】

皆さんのおもってる性格と違うかもしれないが暖かく見守っていただけたら嬉しいです！

キャラはいまはスマブラ64のしかいませんが増やしていく予定です！

それぞれの世界から集められた戦士たち…彼らはともに戦い世界を守ってきた。

しかし、そんな平和な世界に魔の手が忍び寄る…。

## 第1話 メンバー集合！

「おおい、全員集まってくれええ」  
ずいぶんと呑気な声が聞こえた。

「……………なあ、マスター。もっとさあ……………こう……………かつこよさげに言えな  
い？」

赤い帽子をかぶりひげを生やしたやつがあきれながら言った。  
もちろんみんな知っているであろうマリオだ。

「うん、ちよつと無理かな。これが俺のふつーのしゃべりかただか  
ら」

マスターと呼ばれた長い銀髪の青年があっさりと言った。  
マリオはあやうくマスターにドロップキックを決めるところだった  
がすんでの所で持ちこたえた。

「マスター、なんだよ？ 僕これから夕ご飯の買い出しにいくつと  
してたのにさあ……………」

玄關の方からぶつぶつと文句を言う声が聞こえてきた。  
緑の帽子をかぶりひげを生やしているやつが歩いてきた。  
ご存知ルイージだ。

「まあ待て。すぐ終わるからさ。ね？」  
ルイージはぶつくさ言いながらもそばにあったソファにどさつと倒  
れ込んだ。

「……………」  
無言で階段から現れたのは緑の服を着て神剣マスターソードを背負  
った人物だ。

ハイラル王国の勇者リンクである。

「な、なあリンク、なんかしゃべってくれないか？」  
マスターが少しあわてながら言った。

なぜならリンクは機嫌が悪いと無口になる。機嫌が悪いときは部屋中の物を破壊しかねない勢いになるので怒らせてはいけないという暗黙の了解ができています。

「……別に怒ってる訳じゃない……」

リンクは静かに言った。マスターはほっと一息ついた。

「なに？またリンク怒らせてるのマスター？」

ニヤッと笑いながら乱入してきたのは赤い帽子をかぶった子供、P S Iを操るネスだ。

「ばか！そんなわけないだろう！」

マスターは言い返した。クスッとネスは笑うとルイージが寝そべっているソファに腰を下ろした。もちろんルイージの上に、だ。

「うわっばか、やめろ！腰が折れるう！！」

「そんなことないよ、ダイジョーブダイジョーブ」

マリオはそんな光景を微笑みながら見守っていた。いつものことだからだ。

「マスターあ、なにに！？食べ物いっぱい買いにいったいいの！？」  
「そんなことあるわけないじゃん！ここはやっぱり木の実食べ放題じゃない？」

口論しながら階段を転がり落ちてきたピンクと黄色の物体はカービィとピカチュウだ。

「大丈夫だ、どっちもないから安心しろ」  
マスターは宣言した。

とたんに2匹はけちんぼ！といってネスとルイーダがじゃれ合っているソファに走り出した。そしてどうなったかは言うまでもないだろう。

「どうしたんだマスター？またマモノが出たのか？」

心配そうに今までの中で一番まともなことと言って現れたのはフォックスである。

「いや違うぞ。報告だ報告！」

マスターは安心させるように言った。

そっか、とフォックスは言うともリオの隣に立って話し始めた。

「用件は手短かにね」

いつの間にかマスターの隣にたっていたのはサムスである。メンバーの中で一番気配を消すのがうまい。

「お、おおわかってる」

マスターは少し驚きながら言った。

「うほうほ！」

ドンキーが現れた！コマンド？

たたかう

まほう

とくぎ

にげる

マスターはドンキーにライトニグフレアをとなえた！

ドンキーに839のダメージ！  
まもののむれはいなくなった！

「ってちがうだろ！」

どんキーは即座に起き上がって突っ込んだ。

「はいっぎー」

マスターは華麗にスルーした。

ドンキーは落ち込んだ。

「ファルコンぱん「はいやめてー」

ファルコンは落ち込んだ。

「ぶりぶりー！」

なんて言ってるのかは分からないがきつと出番が遅いと言っているのだろう。

マスターはそう勝手に解釈するとキッチンに目を向けて右手の人差し指を少し動かした。

「わあああああ！！！」

キッチンから飛んできたのはヨツシーである。

「また盗み食いか。あまり感心しないな」

「だっておなかすいたんですもん」

しれっとヨツシーは答えた。

「さて…前置きが長くなつたがこれで全員か？」  
そういつて周りを見回す。全員そろつたようだ。

マスターはうんと頷くと

「よしこれから大事なこといづぞー！ほんとにだいじだからね！」

そういってマスターは言った。

## 第2話 新しい寮

「なあ、マスター。なんで集めたんだよ？早く話してほしいなあ。夕飯の買い出しいけないじゃないか…」  
ルイージがやっと子供たちを振り払っていった。

「うん分かってる分かってる、今話すよ」  
そしてマスターは説明を始めた。

「いまの皆が住んでるこの寮さあ、大分古いやつなんだ。だから新しいのを作ろうと思うんだが…」  
そこまで言ってマスターは皆を見渡す。

「お前らがこのままでもいいっていうんなら別にいいんだけどさ…どう思う？」

真っ先に賛成したのはマリオとルイージだった。

「はいはい！俺賛成！」

「うん、僕も賛成かな」

「そうか…で、ほかのメンバーはどうなんだ？」

次に賛成したのはリンクとフォックス、子供たちだ。

「…俺は別にいいぞ」

「俺も俺も！今の部屋飽きたし！」

「ボクも賛成！」

「もちろんボクも！」

「食べ物いっぱいあるならいいよ！」

マスターは頷くと

「で、ほかの皆さんは？」

サムスは軽く頷き賛成の意を示した。  
ファルコンはにやつと笑って親指をぐつと立てた。  
ヨッシーはにっこりと笑った。  
ドンキーはウホっ！と言った。  
プリンは寝てしまっている。

「よし、メンバー全員の了承を受けた！とりあえずこの寮ぶつ壊すから自分の荷物は全部外に出しといてくれえ！！」

>>>1時間後

「……よし、もういいな！？」

メンバーがおおーと言ってさっさとしろおとマリオの声が聞こえた。

マスターは頷くと深呼吸して呪文を唱え始めた。

「……我、創造神の名の下に命ずる。大地よりわき上がれ、シトラスよ……！」

その言葉が終わった瞬間地面がぼこぼここといつて波打ち始めた。そしてぼんつという音を立てて寮が吹っ飛んだ。吹っ飛んだ先には穴があいていてそこに吸い込まれていった。

「よし、第一段階終了！次！」

マスターそういうとまた呪文を唱え始めた。

この呪文はもうメンバーたちには聞き取れなかった。



### 第3話 敵襲！？

「やっほーいと言いながらマリオが走りまわる。」

「メンバーもそれに続いて走り回る。もうばか騒ぎ。」

「もちろんリンク以外です。」

「ちなみに今いるのはエントランス。けっこう広い。メンバー全員が入ってもまだ余裕がある。」

「おもむろにカービィが口を開いた。」

「ねえ、あれなに？」

「そういつて指差した先にはカウンターがあり、女性がたっている。」

「あああれか？受付だよ。」

「うけつけ？」

「ネスがおうむ返しに聞き返す。」

「ま、マスター、受付なんかいらなくない？メンバーしか入らないんだから…」

「そうネスが言つとマスターはニヤリと笑つて言う。」

「わかつてないねえネス。これから入るのはメンバーだけじゃなくなるんだよ…」

「そういつてマスターは宣言する。」

「これからお金をもらつてお前たちを見てもらおうと思つてるんだ！」

「沈黙が訪れた。」

「最初に口を開いたのはリンクだった。」

「……俺たちは見せ物になるということか……」  
その恐ろしく低い声に誰もがぞっとしたという。

マスターの笑みが引きつった。

「そ、そんな人聞きの悪いこと言うなよ……。せめて観戦すると言っ  
てほしいな……」

リンクは静かにマスターの方をむくと

「あんまり変わらんだろうが」

そういうとさっさと奥に入って行ってしまった。

ま、待てよ〜と言いなながらマスターは追いかける。

それに続いてメンバーたちも後を追う。

「ここは……部屋か？」

リンクが口を開く。

適当に歩き回っていたらいつのまにか着いてしまった。廊下の両側  
にずらっと扉が並んでいる。

まだマスターは来ていないようだ。

よし、とリンクは呟くと一番近くの扉をそっと開けた。

そして反射的にすぐ横に転がった。

そしてゆっくりと起き上がると

「……そこにいるのは誰だ？でてこないとこの部屋を爆弾で爆破す

る。5秒数える間に出てこい」

そしてリンクが数えようと叫びかけたとき待て待て待てという声が聞こえクローゼットの中から人が現れた。

「なんで爆弾使うんだ！？そこはせめて火の矢で燃やすぞとかもうちょっと穏便にするべきでしょ！？」

突っ込むところが全体的に間違っている。

「お前が悪い」

リンクはばっさり切り捨てる。

「酷いよ」

その人物は言った。

そこでリンクはその人物をじっくりと観察した。

黒いフードをかぶって黒いローブを着ている。フードからちらりとぞく髪も黒い。

リンクは言っただけだ。

「……………そんなに黒いとハチにさされるぞ」

「突っ込むところ間違っただけ？」

「間違っただけ。事実を言っただけだ」

その真つ黒いやつはため息をつくとき呆れたようにリンクを見た。

「変わり者だね！」

「お前もな」

リンクは言い返す。

黒いやつは目を丸くするとぼそつと何か言ったが何か思い出したよ

うにリンクの方を向くと

「そうだ伝言！ボスがね、スマッシュブライズなんてやめる。さもなければお前たちをいずれ消滅させる。って言ってたよ！」

そういうと黒いやつはじゃあね！といって窓から飛び降りた。

リンクは驚いて窓から下を覗き込んだがそこにはうつすらと魔法陣が光っていただけであいつはいなかった。しばらくその魔法陣を凝視しているとその魔法陣は薄れて消えた。

「リンクう！探したぞ！」

息を切らしながらマスターが駆け込んできた。

「リンク、リンク！……おい、なんかあったのか？」

いつまでも返事をしないリンクさすがに心配に思ったのかマスターは言った。

すると突然リンクが振り向き

「ミーティングルームみたいなのところはないか？」

マスターは驚きながらも返事をした。

「あ、あるけど……」

「案内して、ほかのメンバーにも集合をかける！いいか、大至急だ急げ！」

「?????わ、わかった」

マスターはパチンと指を鳴らし球体を出現させた。

「これについていけばいける」

そういうとマスターは目を閉じた。

リンクは走り出す。球体もその速度に合わせて前を浮遊していく。

大きな事件が始まろうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0739m/>

---

スマッシュ・ライトフェザー

2010年10月9日05時00分発行